

赤磐市報道提供資料

令和 6年 8月 15日

企画展「杉山千代と永瀬清子—『女の新聞』から『女人随筆』へ」を開催します

永瀬清子展示室では、『女の新聞』と『女人随筆』を創刊した杉山千代と永瀬清子との交流を紹介する企画展を下記のとおり開催します。

記

- 1 日 時 令和 6年 9月 6日(金)～11月 17日(日)
開室時間:9時～15時 休室日:月曜日 入場料:無料
- 2 場 所 永瀬清子展示室
(赤磐市松木 621-1 赤磐市くまやまふれあいセンター2階)
- 3 内 容 『女の新聞』、『女人随筆』、杉山千代について書いた随筆の自筆原稿、杉山千代の著書、杉山千代旧蔵の図書などを展示します。
- 4 備 考 詳細は別添チラシを参照ください。

(問合せ先)

赤磐市教育委員会熊山分室 白根
電話:086-995-1360(直通)

2024

9/6(金)▶11/17(日)

杉山千代と永瀬清子

——『女の新聞』から『女人随筆』へ



『女の新聞』第1号
1958(昭和33)年7月



『女人随筆』創刊号
1968(昭和43)年9月

永瀬清子は、愛知県第一高等学校高等科(現・愛知県立明和高等学校)在学時、ドイツに留学していた杉山栄が、山陽新報(現・山陽新聞)に寄稿していた通信を名古屋の新聞で読んでいました。それからおよそ四半世紀後、岡山で暮らし始めた永瀬清子の最初の友人は、その杉山栄の妻・杉山千代だったのです。永瀬清子は、杉山千代のみずみずしい感性と愛情あふれる美しい生き方を尊敬してやみませんでした。この展示では、『女の新聞』と『女人随筆』を創刊した杉山千代と永瀬清子との交流を紹介します。

心を改めることに専念すれば日も足りないのではあるまいか。——杉山千代

(杉山千代「老いての願い」『合歡の花』女人随筆社 一九六九年六月)より

改まらぬ心や性質を死ぬまで日も足らず改めようとする、
その人こそいつまでも若い人なのではなからうか——永瀬清子

(永瀬清子「老いたる友」八十才を過ぎた友人のことば)『焔について 短章集3』思潮社 一九八〇年十一月)より

◆交通案内



◇ 山陽自動車道
山陽・和気ICから車で約15分
◇ JR熊山駅から徒歩約20分

時 間 午前9時～午後5時
休 日 月曜日 入館料 無料
場 所 永瀬清子展示室

(赤磐市くまやまふれあいセンター2階・岡山県赤磐市松木 621-1)

※赤磐市立中央図書館1階の歴史コーナーで、本展示の資料の一部を複製し展示しています。

問い合わせ先

赤磐市教育委員会熊山分室 tel 086-995-1360

くわしくはHPで

URL <https://www.city.akaiwa.lg.jp/annai/kyouikuinkai/kumayama/tenjisitu/index.html>

永瀬清子展示室



杉山千代（すぎやま・ちよ）

岡山県久米南条郡稲岡北村（現・久米郡美咲町）生まれ。岡山県女子師範学校（現・岡山大学）卒業後も苦学し、神田の国語伝習所や二松学舎に通う。山口県立山口高等学校（現・山口県立山口中央高等学校）、林野実科女学校、（現・岡山県立林野高等学校）、就実高等女学校（現・就実高等学校）に奉職。多くの生徒に慕われた。終戦後、夫が公職追放となったため染色教室を開いて家計を支える。永瀬清子、松島杜美、中垣智津、入江延子らと麦の会を開き、そのメンバーを中心に一九五八年七月から『女の新聞』を十年にわたり発行。一九六八年に随筆誌『女人随筆』に切り替えた。著書に随筆集『残燈』、『大鳥花雑記』、『合歓の花』がある。

女が井戸端会議で、もっと政治や社会の話をするようになったら素晴らしいじゃないですか（杉山千代）

教育者 随筆家

杉山千代

1888(明治21)年
～1969(昭和44)年

麦の会
『女の新聞』
『女人随筆』

戦前の私共女性性は、まわりの人々の考え方にいつの間にか押されていて、云わば他の人に嘯われないように暮すのが最も上等の生き方であると教育もされ、思いこまされてもいたのです。しかし、戦後私たちが本当は何を望み、どうあるのが正しいと思うか、それらを考えてみようとして私たちはひとりで集まったのです。杉山千代さんを中心に松島杜美さん、入江延子さん、中垣智津さん、そして私の五人でした。

（永瀬清子『女の新聞』のことも 女の能力出し尽して十年『女の新聞 復刻版』藤田えり子 一九九一年八月）

結婚

社会学者
ジャーナリスト

杉山栄

1892(明治25)年
～1968(昭和43)年

名古屋の新聞で
ドイツから寄稿した
記事を読む

詩人

永瀬清子

1906(明治39)年
～1995(平成7)年

私にはこの千代さんが岡山での女性の友人の第一号になったのである。

（永瀬清子）

彼女の夫は杉山栄氏。「合同新聞」（現・山陽新聞）の主筆とさき、また、戦後のパージでしばらく一家難儀した由も云われたが、氏は私が名古屋にいた時、ドイツからの寄稿をその地の新聞にのせていらした記憶があり、この社会学者のものを私は切り抜きしていたのを思い出した。

（永瀬清子「日々のつづき わが友第一号 杉山千代さんのこと①」『毎日新聞』岡山版 一九九三年五月一日）

栄氏の友人が訪れて議論が始まると、千代も加わり、談論風発、同感してははねかえし、また同感しユーモアもあって賑やかだった。津山中学時代の投稿仲間で清原玉（ラジーザお玉）の研究者の木村毅や坪田譲治、石川達三、藤原審爾、山本遺太郎らがよく訪れた。

（藤田えり子「ひとりの女」『女の新聞』復刻版 一九九一年八月）